

* 宝物引き上げ金具作製

昔、むかし、世の中には井戸のつるべ拾い用イカリ(図1)というものがありました。この金具をご存知の方は相当なお歳であろう。水は水道の蛇口をひねれば出てくるものとお思いであろうが、ほんの数十年前昔には「市」と名のつく所以外に住んでいた人たちは、井戸から「つるべ」を使って水をくみ上げ、バケツあるいは桶で水を運んでいた。「つるべ」は木あるいは竹の竿の先に付けられていたり、ロープの先にぶら下げられたりしていたが、時として、その「つるべ」が竿から外れたり、ロープから外れたり、ロープが切れたりして井戸の底に沈んでしまうことがあった。その「つるべ」が深い井戸に落ちた時、その「つるべ」を引き上げる金具があったのです。筆者は自動光電子午環(PMC)の望遠鏡床の下の階にある水抜き用の井戸の底になにやらある(写真1)ことを見つけている。



図1 つるべ拾い用イカリ



写真1 深井戸の底のなぞの物質

このPMCの水抜き用井戸については、アーカイブ室新聞第53号に記事がある。この水抜き用の深い井戸が望遠鏡フロアの階下の東西にあり、その西の井戸の底になにやらあるのである。それを何とか引き上げようと思っている。その道具として「つるべ」拾い用のイカリを思いついたのである。数十年前昔にはそれほど珍しいものではなかったのだが、今では売っている所が分からない。ホームセンターで捜してみたが当然のように徒労に終わった。

そこで自分で作ってしまえと考えた。材料は太目の鋼線を使い、それを曲げてイカリ状のものを作ることにした。材料は天文台構内に昔あったロンビックアンテナの鉄塔のステーションに使っていた鋼線が転がっている(写真2)ことを覚えていた。

このロンビックアンテナの残骸の鋼線を拾うために工場から鋼線切断のための道具を借りて拾いに行った。ロンビックアンテナは世界から発信される時刻の受信に使われていたものだと理解しているが、これについては項を改める。



写真2 転がっているロンビクアンテナの残骸

写真2に見られる碍子についての鋼線を用いるのだが、この碍子がまた興味深い。何十年も風雨に晒され、野原に転がっていて完全な形を保っているし、構造が面白そうだ。またまたこの碍子については項を改めよう。

さて、この拾った硬い針金の細工をするのはなかなかの難作業であった。まず、万力、金属の丸棒など道具が必要なので工場で作業させていただいた。鋼線と一緒に拾った絶縁の碍子についていた部品も使ってついに写真3のイカリ状のものを作った。



写真3 自作のつるべ拾い用イカリ

さて、道具はできた。これをロープの先端につけて、深い井戸の底から「お宝」を引き

上げよう。楽しみにしている国立天文台歴史探検隊の面々の顔が浮かぶ。

乞う、ご期待！次号以降にこの探検記が掲載されます。

自動光電子午環（PMC）望遠鏡フロアの階下にある水抜き用深井戸は写真4のように常時は蓋がされています。



写真4 階下の水抜き用深井戸（蓋がされている）